

★ 星からの1通話

✦ 黒井千次

星からの1通話

ある晩

チカ、チカ、と

星からの電話が鳴った

あちらにも

太人、と、子供、がいて

樹や、石が、あつて

みんな苦労している

とわかったとたん

電話は切れた

遠い夜空からの

すぐに終わった

短い電話

ショートショート傑作選

誰が読んでも面白い。

電車の中でのほんの3分、喜怒哀楽の
人生が、キミに伝わる1通話。

講談社版 ● 定価 980円

星^{ほし}からの1通^{つうわ}話

一九八四年九月二〇日 第一刷発行

著者——黒井^{くろい}千次^{せんじ}

© Kuroi Senji 1984, Printed in Japan

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽三—三—三 郵便番号二三 電話東京〇三—九四五—二二二(大代表) 振替東京八一三三〇

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——株式会社堅省堂

定価——九八〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。

星からの1通話
目次

幸せな日々	7
朝の出来事	10
まじめな人たち	13
遙かな電話	17
人違い	21
独りの部屋	25
幸せな夜	28
帰る場所	32
ある来訪者	35
妻の休暇	39
水音	42
老女と自転車	46
盗まれた男	50
留守番	53
夜の贈り物	57
ハッピー・バースデー	60
早い知らせ	63
雨の日に	66

乾いた手

三度目の？

ドアの前で

迷子の行方

鍵がない……

遺失物

淋しい人々

急ぐ女

よく効く薬

妻の自由

ある反逆

もういいかい？

静かな夜

隠れ傘

地下に置かれた車

待っている人

電話ボックスにて

おかしい仕事

127 123 120 116 113 109 105 102 99 95 92 89 86 82 79 76 73 70

なにも知らない

寒い夜

ある年男の話

待つ

長い午後

画廊の絵

見えない樹木

尖った屋根

字を読む子供

夜の販売機

銀色のテープ

マリの自画像展

真夜中のニュース

不幸な誕生日

真夜中のアンケート

磨く男

日曜日の隠れんぼ

子供のいる駅

星からの 1通話

装幀・イラスト
曲山賢治

本文レイアウト
山岸義明

幸せな日々

クミ子は幸せだった。

起きて来た娘が、ハイ、といって一通の白い封筒を渡してくれたからだった。中には「母の日」のための手作りのカードがはいっていた。いつまでも元気で死なないで下さい、という娘の愛らしい言葉がそこに幼い文字で書きこまれていた。娘がいてよかった、そして「母の日」があつて本当によかった、とクミ子は思った。

クミ子はまたも幸せだった。

夕食のビールを飲んでいる父親に、息子がハイ、といって小さな紙包みをさし出した。中からは、液体ガスが透かして見える細長いライターが現れた。そえられた手紙には「父の日」の感謝の言葉の下に「健康のため 吸いすぎに注意しましょう」という煙草の箱からの切り抜きが貼りつけられていた。それを見てクミ子は、夜間料金になつてゐるのを確かめた上で、久々に郷里の父に電話をかけた。穏やかな父の声が受

話器の奥に響いた。〈父の日〉があつて本当によかつた、とクミ子は思った。

クミ子はさらに幸せだつた。

静かな雨の降る夜、子供たちが寝しずまつた後で、夫がカバンから赤いリボンのかかつた箱を取り出して、ハイ、と彼女の前に置いた。

「十二年前のジューン・ブライドに——」と夫はいたずらっぽくつけ加えた。首からさげる銀色のペンダント時計が彼女の指先で揺れた。

「ぼくたちの結婚式は、ちょうど〈時の記念日〉だからな」と夫は言いそえた。〈時の記念日〉がきめられていてよかつた、と彼女は声に出さずに呟いた。

やがて定められた〈家庭の日〉には、家中で自転車をつらねてサイクリングに出かけた。帰り道、美しい景色に見とれた夫が脇の溝にタイヤを落として足首をねんざしたが、少したつとそれも快癒した。そんな出来事が、かえつて〈家庭の日〉の楽しい思い出になつた。

時が流れた。

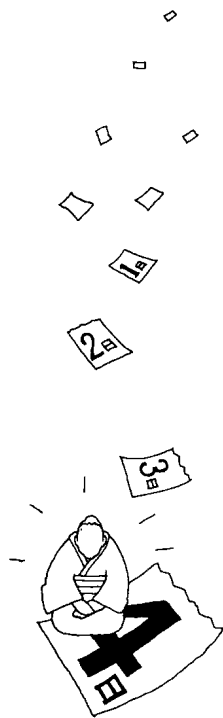
子供たちはすくすくと育つて学校を卒業し、それぞれに結婚して幸せな家庭をつくつた。娘はクミ子の家の近くの病院で女の子を産んだ。息子の嫁がすぐ続いて男の

子を産んだ。孫の世話をするこの出来るクミ子は幸せだった。

「敬老の日」には子供たちから贈り物が届いた。「灯台記念日」には、クミ子と夫は犬吠埼の灯台見物のバスツアーに参加した。「ヘミミの日」に夫は補聴器を買った。へハの日」にクミ子は総入れ歯を作った。

「墓の日」が新しくきめられると、その制定記念の大売り出しに出かけ、クミ子と夫はささやかな墓地を買いいれて洒落た墓石を建てた。「病院の日」に二人は揃って老人病棟に入院した。ベッドは清潔で世話はゆきとどいていた。数々の記念日に守られて自分たちの生涯が幸せであったことにクミ子は感謝し続けていた。

ただ一つ、困ったことに、まだ「死の日」が定められていないので、いつまでもたってもクミ子は死ねないのだった。



朝の出来事

朝、眼を覚ました光男は、枕もとに白い紙のようなものがあるのに気づいた。手にとつて見ると、折りたたまれた紙になにやら字が書かれているらしい。カーテンをあけ、そこに書かれている文字を読んで彼は息がつまりそうに驚いた。

「こんな暮らしに私はもう耐えられません。この家からサヨナラさせてもらいます。十三年間、お世話になりました。貴方も身体に気をつけて下さい。」

光男様

良子」

ズボンに片足を突っ込んだまま思わず居間に駆け出そうとして彼は転んだ。慌てて起き上ろうとする耳に、いつもの朝と同じように台所から朝食の支度をする物音が聞こえてくる。まだ良子がいるのだとしたら、これから家を出るのだろうか。

「あら、おはよう」

流しの前から振りむいた妻の顔は、昨日までのものと少しも変わらない。

「どうしたんだ、この手紙は」

「読んでくれた？　そういうわけなの」

「冗談はよせよ。びっくりするぞ」

「冗談じゃありません。まじめな手紙です」

「だって、良子はちゃんとここにいるじゃないか」

「あら、朝早く出て行ったわよ」

「……それなら、君は誰なんだ？」

「寝ぼけないで。貴方のオクサンよ」

「良子は俺のオクサンだよ」

「え？　本当にそう思っているの？」

「だって、俺は良子と結婚して……」

「良子はねえ、明け方に白いスーツケースをさげて出て行ったの。ここにはオクサンだけが残ったのよ」

妻の自信にみちた言葉に夫はたじろいだ。

「それなら訊くけど、俺はいったい誰なんだい？」

「ばかね、私の亭主じゃないの」

「すると、光男という名の男は今どこにいるんだろう？」

「あら、知らなかった？ 良子のあとを裸足で追いかけて行ったわよ、俺が悪かった、悪かった、って大声で叫びながらね」

光男は身体の芯が急に抜けてしまったような頼りなさを覚えた。言われてみれば、どこかにそんな記憶がうっすらと漂っているような気もした。

落ち着かない気分のまま、追ってくる出勤時刻に追われて光男は家を出た。

「いつていらっしやい」と妻は明るい声をかけた。

会社につくと、彼は朝の出来事を最も信頼のおける同僚にそつと打ちあけずにはいられなかった。

「なんだ、君のところはまだだったのか」と相手はこともなげに答えた。「俺のうちはもう五年も前にすませたよ。おかげで今は夫婦円満さ」

「それなら、出て行った方の二人はどうなったんだ？」

「さあ……。どこかで野たれ死にでもしたんじゃないのかな」

まじめな人たち

G子はまじめな女だった。

そのために、三十歳を過ぎててもまだ男友達一人いなかった。両親に早く死なれ、妹の世話をみているうちに、当の妹の方はいつの間にか好きな男ができて結婚してしまっていた。

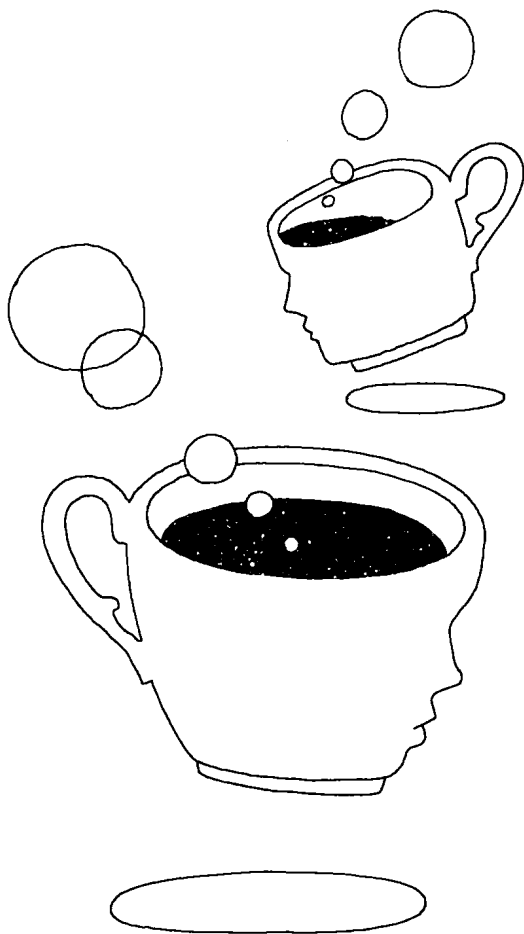
姉さんはまじめ過ぎるのよ、いつも妹に言われた。自分でもG子はそう思った。勤め先の男性たちは、そんな彼女を敬遠するように誰一人近づいては来なかった。

ある日、職場の若い女の子が、日曜日に喫茶店に一人で座っていると必ず幾人かの男から声をかけられる、と話しているのを耳にした。へえ、そんなものか、と感心した。

どうしたわけか、その話がG子は忘れられなくなっていた。私はあせっているのかしら、と考えながらも、日曜日の喫茶店に一人座ってコーヒーを飲んでいると男の近

寄って来る自分の姿が頭を離れなかった。

姪の誕生日によばれて妹の家へ出かける日、デパートでプレゼントの買い物をしてから少し時間が早いのでふらりと通りすがりの喫茶店にはいった。



コーヒーのカップを口に運びながら気がつく、そこは日曜日の喫茶店だった。G子がそのことを意識するのを待ちかまえていたかのように、一人の中年の男がおずおずと近づいて来て声をかけた。

——あの、お茶でも飲みませんか。

——あら、いま飲んでいるじゃありませんか。

——そうですね、本当だ。

男はうろたえた表情を浮かべながらもG子の前に座りこんだ。その気の弱そうな物腰が彼女の警戒心をやわらげる働きをした。若い女の子のいうとおりのことが起こったのも嬉しかった。

——少しお話してもしましょうか。

男はコーヒーを注文してから目を伏せたままG子に言った。

——もうお話していますよ。

——なるほどね、確かに……。

男は落ち着きなく店内を見まわした。

それでも、ぽつりぽつりと言葉を交わしながら二人はコーヒーを飲んだ。